ISSN 0286—0627

Nature Conservation Society of Hokkaido

北海道の自然

社団法人 北海道自然保護協会　1986年12月号　No.31(通巻No 83)

前十勝より
十勝岳本峰を望む
写真：三澤英一

この一年をかえりみて

社団法人北海道自然保護協会会長　八木　健三

一九八六年は北海道自然保護協会にとって激動の一年であった。その震源地はいうまでもなく知床国立公園の森林伐採問題。私自身も夏から秋にかけ知床現地に三回出かけたのをはじめ、北見営林支局との話し合い、官庁への陳情、講演会、座談会への参加など、この問題の解決にむけて大きなエネルギーを注いできた。

前号の「北海道の自然」でご報告したように、ひとまず「伐採は二月まで凍結し動物調査を行う」ことになり、林野庁側の調査員も内定したようだが、問題はこれで解決したわけでなく先送りされたにすぎない。

ここで知床だけでなく、わが国の国有林全体に目をむける必要がでてくる。まず現実を見よう。いま、わが国の林業政策は臨調行革路線にそい、もっぱら国有林の伐採により収入をはかり、人員削減、作業縮少により極力支出を縮減し、独立採算制を守ってゆく方策がすすめられている。これが強行されれば、国有林が「第二の国鉄」として民間に分割されるおそれがあり、林野庁の苦悩も大きい。知床で金になるミズナラやシナノキ、イチイを択伐する最大の理由はここにあるが、こうして得られる本年度の収入が僅か七千万円程度。全く涙のこぼれる話である。

ここでわれわれは国有林について発想の転換を行うべきではないか。森林を単に木材生産機能にのみ着目し、販売価格を基準にした評価をするのではなく、水資源の涵養（ダムの代用）、土地保全と防災（地辷り、山崩れの防止）、大気の浄化、健康な自然環境の供与などの公益機能を重視し、これらの機能遂行に必要な経費は一般会計から繰入れる。これらは国土の安全保障的性格をもつので、その財源は国防費の一部をさいて充当すべきである。

このような措置をとった上、国立公園内の国有林はとくに公益的性格が大きいので原則として林業の対象からは除く。したがって、原始性が高く貴重な野生動物が保存されている知床国立公園内の国有林はすべて禁伐となる。こうすれば自然保護側と林野庁側とのはげしい対立も自から解消する。

これを夢想的ときめつけるひとも多いだろう。しかし先頃東京で行われた「二一世紀の緑化ビジョン」シンポジウムでフロアからこの意見を披露した所、パネラーの大石武一氏も「私も大賛成!!」と支持されたのに力を得た。

今度の問題で稲村環境庁長官の積極的発言は大きな役割を果したと評価されるが、この機に国立公園予算の充実を訴えたい。一九六九年の国際自然保護連合の総会で出された国立公園管理の規準では、「四、〇〇〇㌶あたりレンジャーは一名以上、一㌶あたりの管理費は一〇〇ドル以上」となっており、米国、カナダなどではほぼこの線をいっている。もしこの規準でゆけば知床のレンジャーは一〇名（実際は一名のみ）、管理費は六億円（実際は？）となるのだが、実情はご存知のとおり。GNP第二位、貿易黒字第一位の経済大国日本のお金はいったい何処に使われているのだろうか。われわれの税金がどのようにつかわれているのか、もっと監視する必要がある。

こんな時に「北海道の自然にベタぼれの画家」と自認する東京の桑原宏画伯はこの間札幌で開催された「北海道自然一〇〇選チャリティ展」の収益から十万円を寄附して下さった。また筑波の菊地武・祥子さんは中一の智君と、「森林特集号の中野徹三「森と『森の死』と」を読み合ったあと、何とか森林を救うために…」という手紙をそえて一万円を送られた。心のこもったこれらの浄財は自然保護を進めてゆく上での強力な援軍として心からお礼申し上げたい。また知床森林伐採反対の署名簿も大勢の会員から続々と送りとどけられ、私達への大きなはげましとなっている。これらの力づよい会員のご協力をバックに、一九八七年にはさらに明るい展望がひらけてゆくことを祈る次第である。

北米の自然保護かけある記

八木　健三

この七月一三～一八日米国カリフォルニア州のスタンフォード大学で開催された第一回国際鉱物学会に出席したあと、カリフォルニアの友人を訪ね、さらにニューヨーク、カナダのオタワ、カルガリー、それからバンクーバーにおよぶ約三週間の旅行をした。この旅の間に、できるだけ自然保護や環境保全のあり方について観察するように心懸けてきたので、そのあらましをご報告したい。

空きカンの問題

こんどの旅行を通じて痛感したのは、両国とも空カン問題について多大の努力を払い、それが効を奏していることである。空きカンの最大の問題は、ポイ捨てがもはや我慢のならない環境破壊を引きおこし、その処分のために多額の自治体の予算（それはつまりわれわれの税金だが）が浪費されていることにあるのは、すでに周知のところだ。もう一つの問題は、飲み口の小さな金具が引きちぎられ、無雑作にまわりに捨てられることだ。そのために砂浜や草原で手足を怪我した経験をもつ人もあるし、これが牧草に交って牛や馬に害を与え、鳥獣を傷つけることもよく知られている。

今度米国とカナダの旅行中、ビールやジュースのカンの金具が決してフタから離れないようになっているのに気がついた。金具を引っぱるとカンの内にむかって飲み口があくが、金具は鋲でフタにくっ付けていてとれない。金具のとれるカンは法律により製造が禁じられているのだ。

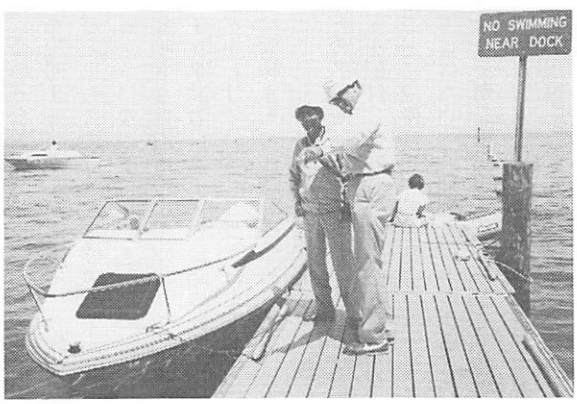
それから空カンがあまり散らばっていないことにも気がついた。もともと日本のように空カンの散乱のひどい処は世界に類を見ないが、かつてはカンがかなり見られたニューヨークなどでも、殆ど見あたらなくなっているのに驚いた。ニューヨーク州は一九八三年第九番目の州として空カンのデポジット制にふみきった効果が現われてきたのだ。ニューヨークの中央公園では、大きなポリ袋に二、三百もある空カンをつめてかついでゆく人びとも見かけた。どの州でもデポジットはカン一つについて五セントであるが、これが清浄化への奨励金となり、各州での統計によると空カンの返却率は九〇％をこえるという。カナダでもオンタリオ、アルバータ、ブリティッシュ・コロンビア等の各州でデポジット制が成果をあげている。五セントというといまの日本円で七～八円だが、それがかくも効目があるのだ。

しかし事ここに到るまでには、両国とも草の根活動が根気づよく行われてきたことを見逃してはならない。米国ではデポジット法の成立を阻止するために、ビール会社、飲料会社などの業界が数億ドルにものぼる運動費を費したという。これらの強大な力と闘って大きな成果をあげた米国の草の根運動の力強さに敬服するとともに、日本でも一日も早く空カンのデポジット制への運動を進めるべきだと痛感する。さらに日本ほどジュースやビールのカンの自動販売機の氾濫した国もない。何とかもっと規制する必要があるのではないか。

タホー湖周辺遊歩道

一九四九年コロラド鉱山学校に留学中知り合った最も古い友人クワイエット博士夫妻にまねかれて、カリフォルニア州とネバダ州境にあるタホー湖の山荘に数日間遊んだ。タホー湖は標高一八九九㍍、長径三〇㌔、米国で最高最大の高山湖で、明眉な風光を誇る州立公園である。クワイエットさんのモーターボートで紺碧の水を切って走ったのは忘れられない想い出だ。その山荘は湖畔の松林の中にあったが、タホー市環境委員会の許可がないと自分の林の木も伐れないということで、松林に曲りくねったドライブウェーがわずかにつけられているだけだった。

このタホー湖を周る遊歩道が計画されているというので、遊歩道をすすめる会のクラブ会長に紹介された。この



タホー湖畔にてクワイエット氏とモーターボート

計画に全力投球中のクラフさんは高校教員を引退された方で、見るからに健康に恵まれた活動家だ。驚いたことにこの全長二四〇キロに及ぶ長大な遊歩道は全部ボランティアの拠金と労力奉仕でつくるという。「ここを歩く人は限られているから、市民の税金で造るべきではありませんからね…」という自前の精神には深く感心させられた。「タホー湖遊歩道」の会は年会費個人一五ドル、家族二五ドル、団体一〇〇～五〇〇ドルとなり、その他に寄附金や、マラソンやスキー大会、気球大会などのイベントでの収益を費用にあて、お金のない人びとは大いに労働奉仕をしているという。ここにもまた米国のたくましい草の根活動を見ることができた。さてこの長大な遊歩道が完成するのは何時のことだろう。

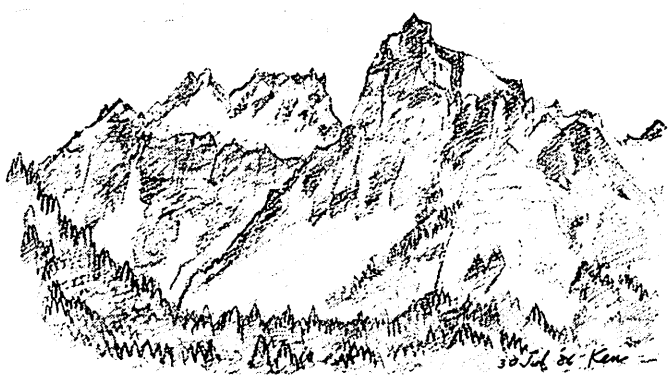
フクロウの保護と森林

タホー湖に滞在中、私は知床森林問題についてクワイエットさん達と大部討論したが、最近これに関係のある新聞の切抜きが送られてきたので、ここにご紹介したい。北米太平洋沿岸北部の森林中に棲息する「斑点フクロウ」は現在は二、〇〇〇番ほどと推定されるが、絶滅のおそれがあるため、林野庁がオレゴン、ワシントン両州の針葉樹林四万八千ヘクタールを保存することを提案した。ところがここには樹令二五〇年、高さ六〇メートルのモミ類が繁茂し、三千～七千億円に及ぶので、木材業界から強い反対の声があがっているという。生態学者によればこの「斑点フクロウ一番は、約一〇〇ヘクタールの領域を必要とする」というのに対し林業者は「フクロウは二次林にも棲息しうるし、必ずしもモミの純林でなくてもいい。保護論者はフクロウを森林伐採反対のシンボルにしているにすぎない」と反論している。

その討論のあり方が知床森林問題にもたいへん共通する点があるのに興味をひかれたが、米国の場合、林野庁が生態系保存を打ち出している点に大きな違いが見られる。わが国の林野庁がどんな風にこれを受けとめるのか、訊いてみたい気がする。

ガチノウ公園

カナダの首都オタワはいかにも古きよき時代のイギリスの面影を伝える落着いた都であるのに対し、オタワ川の対岸にあるハルの町はごく普通の市街である。このハルの町をぬけて西北に三〇分位、車を走らせるとガチノウ公園につく。そこまで続いた緑の台地がストンと落ちて、足許から広大なセントローレンス低地がはるか見渡す限り広がっている。右手の小高い丘は十数億年前の先カンブリア紀層であるのに対し、左手にひろがるオタワ川流域はすべてたかだか百万年の最も若い第四紀層からなっている。さらにもっとも低い処には一万八千年前のウィスコンシン氷期（ヨーロッパのウルム氷期に相当）の氷河堆積物があり、その上を一万一千年前に浸入したチャンプレーン海の若い堆積物がおおっている。地盤の隆起、変動のはげしいわが国ではとても見ることのできない単純な、しかも壮大きわまりない光景というべきであろう。



氷河をいだくバーベル山（バンフ）

この高台の展望所にはこれらの地質を説明するパネルがあって、一般の人びとにもこの壮大な地球の歴史がわかるようになっている。またこの付近には小さな案内所の小屋があって、女の子が来訪者にガチノウ公園の説明書などをわけている。ここではまた、生物に興味をもつ人びとの求めに応じ、ここで見られる鳥や昆虫、魚や爬虫類などの名称を記した観察用の小さなノートを配付しているのに感心した。項目ごとに分冊になっており、ウォッチングにはたいへん便利だ。希望する人には全分冊を提供するようだから、相当なサービスといえよう。鳥の分冊を見たら、"Have nice birding"と記されていた。どうやらバーディングはバードウォッチングの縮少詞として広く用いられ始めたようだ。

この公園の中にはいくつもの小さい湖沼がある。おそらくあるものは氷河の堰止湖であろう。そんな湖の一つブラックレークにはビーバーダムやその巣があった。するどい歯で白樺の根元を噛って倒し、そのまわりに多数の木の枝をつみ重ねてつくった巣は直径が三、四メートルもある大きなものだった。肝心のビーバーにはお目にかかれなかったが。

オタワ川に注ぐリドウ川から分れ、ド

ウズ池と市内を結ぶリドウ運河はオタワの観光の目玉である。その遊覧船での往復はたのしい二時間の船旅だったが、乗船のときに私達は「シニアーシチズン（六〇才以上）か？」ときかれ、「イエス」というと六ドルの船賃が五ドルになった。このようにカナダや米国でも方々でシニアシチズンの優待をうけたのはうれしかった。リドウ運河の両岸には緑の並木が美しく、ジョギングをする人びとが多かったが、冬になると運河全体が氷結し、長さ五、六キロに及ぶスケートリンクとなるという。「世界最大のスケートリンク」というのがオタワっ子の自慢の種だ。

バンフ国立公園

オタワからカルガリーにとび、その西のカナディアン・ロッキーのバンフ国立公園を久し振りに訪れ、数日間の山旅を楽しんだ。ここは一九八八年の冬季オリンピック会場に決定し、そのためにハイウェイの近くに建てられたスキーのジャンプ台はまるで工場のベルトコンベーヤーのように見られる。大倉シャンツェに比べるとまことに殺風景な眺めだ。アーチのように両方から傾いたカスケード山が見えてくると、そこはもうバンフの街だ。

目抜き通りの一角に公園のインフォーメーション・センターがあり、大勢の若い女性職員が来訪者の質問に答え、その希望によってコースを教えたり宿舎の紹介も行っている。ここではまた各種のガイドマップやリーフレットを提供してくれる。いずれも美事なカラー写真入りで、左開きに英語、右びらきにフランス語の説明という独得のカナダスタイルで、内容もかなり科学的に充実している。

このバンフがカナダ国立公園第一号として、一八八五年に指定されてから百年ということで、昨一九八五年には「一八八五―一九八五　世襲財産保護の一〇〇年」のキャンペーンが大々的に行われ、ビーバーを描いたシンボルマークがすべての印刷物につけられていた。

ボー川に遊ぶヘラ鹿（バンフ）

ここで購入したバンフと、隣接するジャスパー両国立公園の二〇万分の一地形図はたいへん鮮明な印刷で、氷河の分布も詳しく記されて山旅には絶好のガイドとなった。今後旅行する方には是非おすすめしたい。二〇万分の一なのに、この二枚を合せると優に畳一枚分を越えることからみても、この二つの公園の広大さが想像されるであろう。

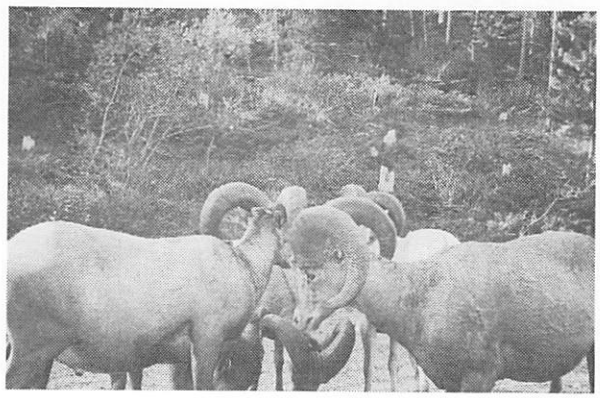
氷山の山々

バンフの、またジャスパー国立公園の、最大の魅力といえば、氷河と、氷河によって刻まれた山々の美事な景観であるといえよう。ガチノウ公園のある東部カナダ楯状地が、十数億年前の地層がほぼ水平に横たわっている静の世界であるとすれば、僅か数千万年前のはげしい地殻運動の結果地層が褶曲し、断層で断ち切られたロッキー山脈を中核とする地域は、まさに動の舞台といえよう。しかもその後、僅か数十万年前にはじまった氷河時代から今日にいたるまで、営々と氷河の彫刻が進められてきたのがバンフやジャスパーの山々である。バンフからジャスパーまで総延長二五〇キロのハイウェイを氷河パークウェイ（フランス語では氷河プロムナード）とは名付け得て妙。人びとは道の両側に氷河をいただく尖峰がつぎつぎと車窓を去来するのに応接のいとまがない。

清冽なボウ川の刻む谷間にはレイク・ルイーズをはじめ、ボウレイク、ペイトーレイクなど、氷河の運んだ堆石で堰きとめられた湖が、明るいエメラルドグリーンの水を湛え旅人の目を楽しませる。さらに少し山地に入りこむと濃い青緑色の湖が、氷河の山々にかこまれてひっそりと静まりかえっている。これがモレーン・レイクで、その風景はカナダの二〇ドル紙幣の裏に印刷されているので、人びとにはなじみ深いものだ。

モンブランやマッターホーン、ユングフラウといった山々の高さと壮厳には欠けるというものの、これらの氷河の山々が、奥深くに入らずとも、ハイウェイをドライブする間に充分眺望を楽しませてくれるところに、バンフ・ジャスパー国立公園の人気がひそんでいるのだろう。

そのハイライトがジャスパー公園の入口に現われるアタバスカ氷河だ。この辺の最高峯スノードームを中心に発達する、ロッキー山脈最大のコロンビア大氷原から流れ出す六つの氷河の一つで、道路付近までせり出している。路傍の駐車場から数百メートルで達する氷河には観光客が時ならぬ氷の感触を楽し



牡の大角羊のむれ（バンフ）

んでいる。ここでも氷河は年々後退（縮少）し、私がかつて訪れた一九七〇年当時の末端を示す標識から、氷河はさらに数十㍍も離れているのに驚かされた。

野生動物の楽園

バンフではハイウェイで野生動物によくお目にかかれるのが楽しみだ。鹿やエルク（大鹿）はときどきハイウェイに沿った林の中を歩いているのが見られる。圧巻だったのは大角羊の一群がハイウェイから入りこんだ道路に沿って歩いているのに出会ったことだ。仔羊を先に角のない牝がつづき、最後に見事に曲りくねった大きな角をもった数頭の牡があらわれた。どうやら冬期間道路にまいた塩をなめているようだった。夕方同じ道を通ったら牡だけの数頭が悠然と歩いていた。

馬のように大きくて、左右に二、三㍍も広がった角をもつのがムース（ヘラ鹿）で、水辺を好んで棲息する。沢山の車が駐車しているので見ると、角のない牝のムースが池の中を歩きまわっていたが、突然ジャーッと小便をしたのには皆唖然としてしまった。

「あなたはベア・ランドにいます」という熊の画入りの標識は方々で見たが、イエローストーンやカトマイ公園のように、熊にお目にかかる機会はなかった。ただ一つ興味深かったのは公園のピクニックランチ用テーブルの付近に実に頑丈な鉄製の大きなゴミ箱があることだった。これは残飯を熊があさらないための特製のゴミ箱で、大人が漸く開けられるものだった。熊が残飯の味を覚えることによる人間との接触事故をふせぐための配慮である。残飯をあさるようになった熊は麻酔銃をうったあと、遠隔の山地に運ぶということもきいた。

人口の割に国土が広大で、自然も豊かに残されているカナダだけに、自然保護を行い易い利点はあるのだろうが、それとともに行政面での努力の大きいのにも感心させられたことである。国立公園を管理する行政職やレンジャーの数が、バンフ国立公園だけで職員が五〇〇名、そのうち動植物関係の専門員が三〇名にも達しているのに比較すると、北海道の五つの国立公園全域を管理する環境庁の職員がわずか一三名というのは雲泥の差である。アルバータ州の野生動物保護行政の研修に行かれた道自然保護課の赤坂猛氏（現在根室支庁）の報告によれば、狩猟を監督する部局においても、捕獲された熊や鹿や羊については頭骨などの提出を求め、これに基づいて正確な生態研究が行われ、これから野生々物の保護方法が確立されてゆくということであった。ヒグマが現われたといっては直に山狩して駆除してしまい、しかもヒグマ研究会などの懸命の努力にもかかわらず、それらの個体の科学的データの蒐集も充分に行われていない北海道の現状はどう見たならばいいのであろうか。

米国の国立公園を歩いたときに、レーガン政権になってから、予算の削減に悩んでいるというレンジャーの声を聞いたが、それに比べるとカナダの方はめぐまれているようだ。ところでその米国の国立公園の予算でさえ、わが国のそれと比べてみれば、あまりにも大きな格差に驚かざるを得ない。

さらに今度の旅行の間に訪れた米国やカナダの州立や国立の自然公園のどこに行ってみても、わが国で普通に見かけるゴミは全く見られなかった。このモラルの落差は一体どうして生ずるのだろう。

「とまれ官民ともに、もっと自然の保護に力を致すべきだ」というのが、この駆け足旅行の結論であった。

（当協会会長）

原稿募集

原稿をお寄せ下さい。身近な自然の歳時記や感想文、自然保護に対する意見、自然観察の記録や調査研究の成果など。また、写真やイラストも歓迎いたします。

寄付金

金千八百円・赤祖父俊一様、金一万円・菊地　武様、金十万円・桑原　宏様、☆ありがとうございました。

個人会費納入のお願い

個人会費を未納の方は、お早目に納入くださるようお願い申しあげます。

個人会費の年額は次のとおりとなっております。

個人会員A　一口三千円、個人会員B、学生会員　各二千円

然別湖周辺国有林の伐採問題

川辺　百樹

然別湖といえばオショロコマという位、然別湖のオショロコマは有名である。また余り公にはしたくないのだが、最近は然別湖といえばシマフクロウを連想する人も多いにちがいない。オショロコマが泳ぎ、シマフクロウが支配するこの然別湖周辺の国有林で大規模な伐採計画がもち上がったのである。今年九月チェーンソーがうなり出してこの問題は表面化した。

林野当局の説明によると、十勝西部地域施業計画（昭和六〇年～六九年）に基づき然別湖の西岸および北岸の大雪山国立公園第二種特別地域と第三種特別地域二、一〇〇haから十一万五千㎥の木を切り出すというのである（伐採率二十一％）。今年度については、一七六林班（二〇〇ha）で六、九〇〇㎥の伐採を予定し、すでに九〇〇㎥を伐採し終えたということである。

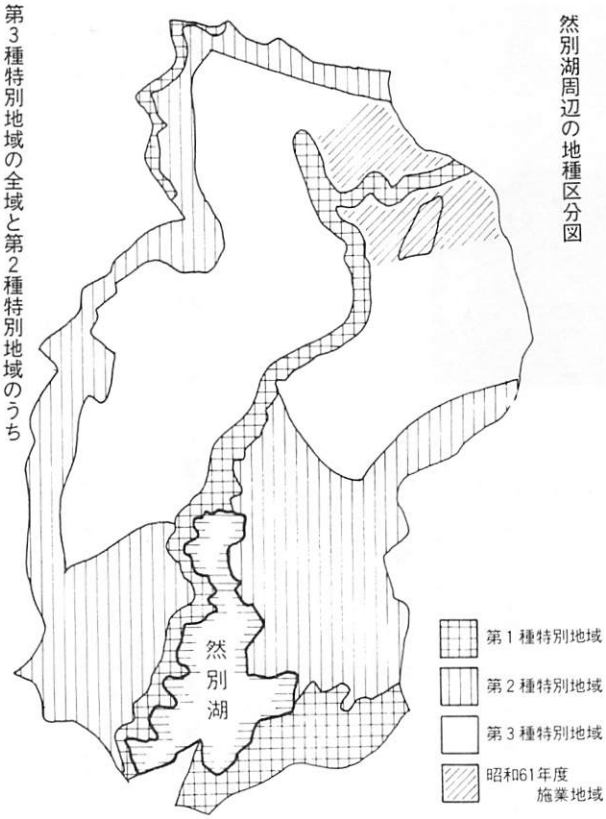
然別湖の北岸に注ぐヤンベツ川水系はオショロコマの生息地として北海道の天然記念物に指定されているところである。またこの水系にはオショロコマを食糧源としている国の天然記念物シマフクロウが生息している。伐採の是非は別として、このような地域で施業を行うというのであれば、たとえ知床のように当初から伐採反対という声があがっていなかったとしても、これらの天然記念物に十分配慮した施業がなされて当然であった。しかし現実はヤンベツ川水系でもオショロコマの産卵場所として重要な位置を占めている「熊の沢」の沢沿いに作業道をつけ、しかも産卵時期に沢に泥水を流入させるという無神経ぶりであった。このような経緯を受けて北海道教育委員会は清水営林署に対し天然記念物の現状変更申請を命じたのである。目下審査が行なわれていると聞いている。

我国が世界最大の木材輸入国であり、かつまた国有林の会計が赤字をかかえ林業関係者の雇用不安という現実があることを踏えても、残すべき森林つまり森林経営の対象とすべきではない森林があることを強く主張したい。残すべき森林の一つがこの然別湖周辺の森林であろうと私は考えている。

然別湖のオショロコマ（より正確にはミヤベイワナ）は、道内の河川にすむオショロコマ（俗にイワナとも呼ばれている）と異なり、最終永河期以降この然別湖でプランクトン食へと食性を変化させ新たな種へと変わる過程にある魚である（詳しくは前川光司・後藤晃著「川の魚たちの歴史」中公新書をご覧いただきたい）。北海道は日本列島のなかでは固有種の乏しいところである。そんな北海道で現在種分化のドラマが演じられている然別湖は大いに注目される存在といえよう。また平野部の河畔林を追われ絶滅の危機に瀕するシマフクロウがこのミヤベイワナを食糧源としてここの針葉樹林でひっそりと生き延びているのである。中央高地（大雪山系）の河川でこれほど餌条件に恵まれているところはない。このようなところから蓄積の二十一％も伐採するということを欧米先進諸国の人人が聞いたなら何というであろうか。この伐採問題はまさに我国の「知的水準」にかかわる問題である。そこで私は声を大にしてこの地域での施業計画を廃止するよう訴えたい。〈十一月十八日記〉

（当協会会員・投稿）

然別湖周辺の地種区分図



第3種特別地域の全域と第2種特別地域のうち然別湖西岸のところが施業の対象となっている。

延期された手稲山スキー場計画と今後

紺谷　友昭

この年も間もなく終ろうとしている。ことしの北海道の環境問題で数少ない明るい知らせの一つは札幌の手稲山スキー場建設計画が延期になったことであろう。建設阻止のための運動にはじめから参加した者の一人として事態の経過を報告し、さらに今後のスキー場問題についてすこし考えてみたい。

このスキー場を計画したのは手稲山の大半を所有している王子緑化株式会社である。計画されたスキー場は手稲山の南東斜面の七十四㌶を開伐し、リフト五本、ゴンドラ、レストハウス、駐車場を作ろうとするものである。そして既設の王子緑化テイネハイランドスキー場とリフトで結び旧手稲町側からも西野側からも双方を利用できるようにするというのである。

関係者によると、この計画は一九八四年の十二月に「手稲山の自然を守る市民会議」に示されていた。市民会議は札幌地区労を主体とした団体で、かつてテイネハイランドスキー場建設に反対するため組織されていらい、王子緑化との交渉団体になっていた。地区労には札幌市役所職員組合も加入しているが、その本庁第二支部の役員である浅井良雄（以下、各人とも敬称を略す）は計画がいつまでも外部に公表されないでいると着工される可能性がきわめて高くなると判断し一九八五年四月十六日の北海道新聞で報道してもらったという。

この二、三日あと本協会の理事をしていた紺谷は同じ理事の鹿士政春と会った際、手稲山の森林がこれ以上荒廃するのは黙視できないとして計画に反対する運動を起すべきことを提案した。鹿士もすぐ同意した。

そして直ちに道新の紹介で浅井と、同じ市職員の鈴木直樹と協会事務所で会うにいたった。

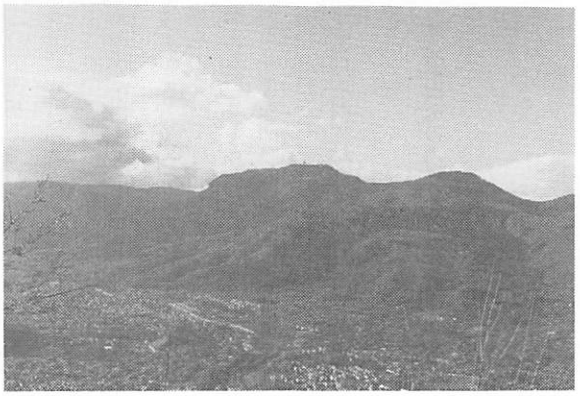
このあと鹿士は、支笏湖周辺の開発に反対する団体を作っていた前田重和を運動の呼びかけ人として推せんし四月二十五日、札幌市中央区の北光教会で最初の会合を開いた。この時は鹿士の連絡で、北海道自然保護団体連合の寺島一男、田中明子が出席、また新聞をみて西野の人など計二十五、六人が出席した。

以上ややくわしく書いたのは市民運動もまた自然に発生するものではないこと、少数者の決意がなければ運動は開始できないこと、既存の団体が運動を実現するテコの役割をすることがここにも示されているからである。労働組合がなかったり、あっても力が弱かったり、自然保護団体が一つもない状態であったら手稲山を守る運動は起きなかった可能性がある。

こうして生まれた「手稲山の自然を守る会」は一九八五年五月十五日、王子緑化、札幌市および札幌市議会、道および道議会に計画を中止し森林を保全することを求める要望書、陳情書を提出。五月二十六日には会員および自由参加者約二十人がスキー場計画地の視察を行っている。これらの活動は新聞やテレビで遂一報道され、スキー場建設の是非について市民の関心を呼ぶことになった。また、この問題が市議会の代表質問でとりあげられたり、市長への記者会見で質問されることもあって反対の動きは社会的に無視できないものになっていった。

一方、スキー場計画地に間近い西野では右近優らが地元住民に密接した運動を始めていた。そこで八月二十一日、「守る会」のメンバーが中心となって西野の昭和会館で説明会を開いたところ主婦など約八十人が集まり地元独自の団体を作ろうとする声が強く出された。このため九月二十八日には西野第二会館で集会を開らき「手稲山を守る西区市民の会」を設立させた。この会の発足で「手稲山を守る会」は前田を中心として全市民を対象とした運動を行なうことになったが、以後運動の実質的中心は「西区市民の会」に移ることになった。

本協会でもこの間、手稲山のスキー場建設に反対すべきかどうかは理事会のときごとに論議されていた。そして



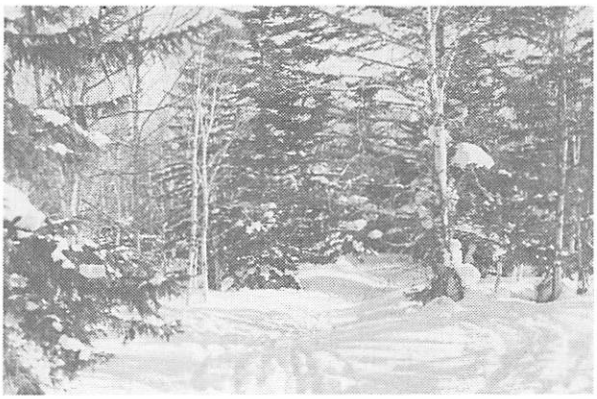
札幌側からみた手稲山。スキー場計画地は右側の小高い山（第二手稲山）から写真右側の部分。下の平地は平和、西野の市街地。

十月六日には八木会長、中野常務理事、紺谷理事と西野の右近、浅井伸男それに植生を研究する北大院生の露崎史朗の六人が計画地のまん中を通る山道を第二手稲山の頂上まで踏査した。その後の理事会では手稲山をふくむこれ以上のスキー場建設には反対しなければならないとする意見が大勢を占めた。八木会長の判断が会を導いたようである。そして十一月二十六日には知事、札幌市長、林野庁長官、環境庁長官に「スキー場の規制および環境保全を求める要望書」を提出した。

明けて一九八六年の一月二十二日には西区市民の会が札幌市緑化推進部の幹部と面会し、スキー場計画の撤回を行政指導するよう申し入れた。そして手稲山の自然公園化がもっとも望ましく、次善の策としては税の優遇を行って森林を保全することを提案した。これについて同部の熊井副参事は同部としては手稲山の保全を望んでいると明確に回答した。二月二十日には市議会環境消防委員会で市民の会が提出した陳情の趣旨説明が行われた。

反対運動を拡大させるため三月九日には自然保護団体連合の田中明子の尽力で「手稲山西野スキー場計画に反対する連絡協議会」が結成された。これには連合、守る会、西区市民の会、道央地区勤労者山岳連盟、札幌市職員組合本庁第二支部、シマリス・自然環境友の会が参加し、三月十六日には約四十人がスキーで計画地を調査した。

雪がとけた四月五日には西区市民の会と王子緑化との話し合いが行われ両者がはじめて顔を合わすことになった。この時は、山岳のスキー場化が森林の環境保持機能を失わせ、また自動車の集中、夜間照明、騒音等が住民の生活を悪化させることを指摘し、山林の育成が王子緑化の社会的責任であるとする社長あて要望書を提出。話し合いに出席したテイネハイランドの岡田事業部長ら四人には手稲山が数十年前まで無主の山であり、企業がこれを損傷すべきではないことを強調した。これに対し岡田部長は、不振になった林業を助成するためスキー場経営を計画していること、造成に配慮したスキー場は環境を破壊しないこと、広域的な森林の保全は政府の責任であると答えた。


スキー場計画地内の森林―林道付近。

四月二十日には反対連絡協議会に加入する団体が札幌の三越デパート、大通公園で街頭署名を実施した。西区市民の会はその前から一万人を当面の目標に署名運動を開始している。

夏に入って反対側は王子の着工申請を予期し困難な戦いを覚悟していたころ、七月十五日の北海道新聞は王子緑化の竹橋社長と王子製紙苫小牧工場長が八日に札幌市の長部環境局長を訪れスキー場計画を当分延期することを伝えたと報道した。これは二十九日の市議会環境消防委員会でも報告された。

＊

これまでの開発計画で開発側がすんなりと計画を撤回したことはほとんどなかった。われわれにとっては実際、思いがけないことであった。

王子緑化はなぜ計画を延期したのだろうか。市議会で王子側の言として伝えられたのは「円高による経済変動、スキー場の競争激化で王子グループの事業全体の見直しをしている」ということであり、実相はうかがえない。

考えられることの一つは、反対側が市街地の近くにスキー場を建設することの危険を強く打ち出したため王子はこれに対応して水害防止工事など数多くの対策を立てねばならず当初計画を上回る造成費用がかかることが予想された。この投資額を償却するには相当の年数を覚悟しなければならず投資効果を再検討しなければならなくなった。また着工しなくても王子グループ全体としては存続できる余力をもっている。それをあえて強行して企業のイメージを傷つけることもおそれた可能性もある。ともあれ着工を凍結したことは評価すべきであろう。これが新興の観光会社であったなら、現行の環境法の不備をタテにとって着工を強行したかもしれない。

＊

手稲山をはじめスキー場はこれからもふえるのだろうか。その前になぜ近年になって大スキー場があちこちに作られるようになったか考えてみよう。一九六〇年代の高度成長期のあと日本経済は停滞期に入った。高度成長期に蓄積された利潤は物資的商品を作る生産的投資に向けることはできず、観光などサービスから収入を得る不生産的部門に投資されなければならなくなった。また日本の林業は外材の輸入で全く衰退しており山村はスキー場でもなんでも受け入れなければならなくなっ

ている。道内各地の自治体が第三セクターを作って率先してスキー場を作っていることに見るとおりである。直接的には航空、ホテル業界が冬期間の客不足をスキー客でカバーするのに熱心である。

このように道内にスキー場が増設される経済的原因がある一方で、スキー場をこれから増設できない経済的必然性もある。それは生産的産業が不振になった同じ理由からである。

物質的商品は生産的労働者とよばれる賃金労働者によって生産されている。スキー場など不生産的部門の経営者も労働者も、生産的労働者の賃金か彼らの雇い主の利潤（およびその利潤の分けまえにあずかる人人）のいずれかからだけ支払いを受けることができる。

したがって生産的部門が停滞すれば、不生産的部門はそれ以上に停滞する。不生産的労働部門の労働者や雇い主同士の支払い合いによる経済効果は全くタカが知れている。

また今後とも増税は確実であり、国民が自由に使える収入の比率は減っていく。そうなると交通費やリフト代のかかるスキー場に行く人はふえないだろう。既存のスキー場の競争は王子のいうように激化するだろう。

札幌市は手稲山スキー場問題が起ったため、市内のスキー場が市民や観光客に十分かどうかを調べるとして一九八六年一月十五日から十一か所のスキー場全部で休日と平日の二回に分けて調査を行なった。その結果が全く公表されないのは両日ともスキー場は閑散としていたからではないかと私は推測している。

このように長期的にみればスキー場の未来は暗い。しかし短期的には地の利のよく競争に勝ちうるところでスキー場を作る企業はもちろん出てくるだろう。その場合には開設の許可権者である市や道など自治体の判断が問われてくる。手稲山についていえば一九七二年のオリンピックの際、札幌市が王子にスキーコース、リフトの建設を求めた。オリンピック終了後は施設をすべて撤去するという王子側の条件も市に押し切られ、それではその部分と市有林か道有林と交換しようという王子の希望も実現できなかったという（一九八六年一月二十日毎日新聞道内版）。これが真実とすると市幹部やその背後の財界の暗い見通しが現在の手稲山の荒廃の一つの要因となっているといわなければならない。これからは市民がますます力を強め自治体を導いていかなければならない。

＊

これからのスキー場はどうあるべきだろうか。この秋、十勝の新得町のあたりで町民向けらしい一つのスキー場をみた。その国道ぞいの小さなスキー場は頂上と中腹の一部に木木がまとまった形で残しており、他の山腹はササでびっしりとおおわれていた。ふもとには花壇があり赤や黄の花が一面に咲いていた。このようなスキー場なら環境を傷つけないだろうと思った。

上級者や観光客のための大スキー場はどうするか。それは現在あるスキー場で十分である。そして森林や下草をできるだけ多くし環境を破壊しないよう行政指導を強めることだ。採算がとれなくなったスキー場は森林にもどすことを所有者に義務づけることだ。

そのかわりに自治体がお金のかからない歩くスキーや山スキーのコースをふやすことだ。このようにするとスキーやスキー場は環境の敵とはならないのである。（当協会常務理事・投稿）

協会の活動

（会場称略）

○昭和六十一年八月十五日（金）
同右要請書に対する北見営林支局長回答書及び会談
○第六回常務理事会
主な議題
一、昭和の森を守りたたえる会協力依頼の件
二、北海道の美林を歩くの件
三、雨竜湿原保全の件
四、知床国立公園内森林伐採問題の件
○八月二十八日（木）
知床国立公園内森林伐採問題について北見営林支局長と会談
○八月三十日（土）
知床国立公園内森林伐採問題について北見営林支局より譲歩案提示
知床自然保護協会、道自然保護団体連合へ、同右譲歩案意向打診
○九月二日（火）
第七回常務理事会
主な議題
一、知床国立公園内森林伐採問題の件
○九月六日（土）
道自然保護団体連合代表者会議出席
○九月八日（月）
知床国立公園内森林伐採問題について北見営林支局にて会談
○九月十一日（木）
第一〇四回理事会
主な議題
一、知床国立公園内森林伐採問題の件

昭和六十一年十二月十五日発行
〒060 札幌市中央区北一西七 広井ビル五階
発行所 社団法人 北海道自然保護協会
電話（〇一一）二五一―五四六五
郵便振替口座 小樽 一―四〇五五
北海道拓殖銀行本店 〇一七二五九
北海道銀行本店 一〇一四四四
発行人 八木 健三
印刷 広報社印刷株式会社

※本誌は再生紙を使用しています。